

関わり続ける定住のカタチの実践による
「結の故郷」づくりに向けた基礎的研究

報告書

平成 31 年 3 月

関西大学環境都市工学部

北詰 恵一

第1章 研究の目的と背景

多くの地方都市において、若者の都市圏への流出が加速化しており、地域の衰退が懸念されている。まちづくりや地域づくり等、地域の固有性が重要となる活動においては、地域住民自身の自発的・主体的な参画が不可欠な役割を担う場合が少なくなく¹⁾、住民が身近な生活環境の場の問題に対して、地域の課題解決のための公益的な活動の主体として、様々な活動を展開することが求められている。実際に京都・醍醐地域には行政に頼ることなく地域住民が主体となって運営する醍醐コミュニティバス²⁾が存在し、地方都市においては中心市街地を活性化するための方策として「イベント」や「祭り」も重要な手法³⁾として位置づけられている。

これまで行われてきた研究では住民が地域活動に参加することの重要性、実際に行われている住民参加の事例⁴⁾について述べられている研究はあるものの、地域活動に参加している住民がどのようなきっかけで参加するに至ったかのプロセスについて述べられている研究は見当たらない。そこで本研究では現在行われている地域活動において、地域活動に不参加の住民がどのようなきっかけで活動に参加するようになり、その後どのようにして活動に定着していくのか、その過程・要因を明確にし、それぞれの段階に応じた参加までの働きかけ方を提案することを目的とする。

第2章 住民参加の捉え方

2.1 住民参加の分類

2.1.1 住民参加のはしご

住民参加についてこれまで多くの分類分けがされていき、例えば米国の社会学者シェリー・アーンスタインによる「住民参加のはしご」(表 2.1-1)では住民参加を8段階に分けた。

表 2.1-1 アーンスタインの住民参加のはしご(1969年)

「住民参加のはしご」の8段階			
住民の力が生かされる 住民参加	8	住民によるコントロール	住民主体の活動に行政を巻き込む
	7	委任されたパワー	住民主体の活動
	6	パートナーシップ	住民と行政との協働、決定権の共有
印としての住民参加	5	懐柔	行政主導で住民の意思決定のある参加
	4	意見聴取	与えられた役割の内容を認識した上での参加
	3	お知らせ	形式的住民参加(限定された参加)
住民参加とは言えない	2	セラピー	お飾り住民参加(利用された参加)
	1	操り	操り参加(趣旨や役割の不明確な操られた参加)

1～2 の段階は「住民参加とは言えない」段階、3～5 の段階は「印としての住民参加」の段階、6～8 段階で初めて「住民の力が生かされる住民参加」になるとしている。他にもマッセ OSAKA(大阪府市町村振興協会)では住民参加を6段階に分類した。

表 2.1-2 マッセのはしご

マッセのはしご			
行政<住民	6	持続可能な住民主体	住民を行政が支援する
	5	住民主導	住民がまちづくり活動の主体となり、行政を牽引している
行政=住民	4	協議のシステム	行政と住民が対等の立場で一緒に事業を行う
行政>住民	3	行政主導のシステム	住民参加型イベント
	2	意見聴取	行政が市民の意見を言う
	1	意見可能	苦情、行政批判等意見を言う(目安箱など)

しかし実際には行政>住民に満たない、地域活動に「不参加」の住民も存在する。ここで本研究ではアーンスタインの住民参加はしごやマッセのはしごを参考にし、「不参加」から「行政<住民」までの住民参加を作成した。

2.1.2 本研究での住民参加の分類

本研究で用いる住民参加は、アーンスタインの住民参加のはしごと同じく住民参加の形態を8段階に分け、住民の行政との関わり方について①不参加②行政>住民の参加③行政=住民の参加④行政<住民の参加の4段階に分けた。

①不参加

1.不参加(住民に参加意思・願望無し)

2.不参加(住民に参加願望有り)

②行政＞住民の参加

3.意見不可(形式的住民参加)

4 意見可能(住民に意見を聞いてくれる場がある)

5 行政主導の住民参加型

③行政＝住民の参加

6.パートナーシップ(住民と行政との協議・決定権の共有)

④行政＜住民の参加

7.住民主導(行政の牽引)

8.住民によるコントロール(住民主体の活動に行政を巻き込む, 行政が支援)

2.2 既存研究から見た住民参加

堤(2018)が行った研究では大野市民を対象者として郵送配布・回収によるアンケート調査を行った.研究では住民参加について触れてはいなかったが, アンケートの分析次第で住民参加の分類分けを行えるため分析を行った.

2.2.1 アンケート集計結果

調査期間は, 平成 29 年 12 月 8 日から平成 30 年 1 月 9 日とし, 大野市全域に合計 1120 通のアンケートを配布した.結果, 回答者数は大野市民 334 人(男性:189 名, 女性:142 名, 不明 4 名), 回収率が 29.8%であった.年齢別にみた回収結果は表 2.2-1 の通りである.

表 2.2-1 アンケート回答者年齢

	アンケート回答者(人)	割合(%)	人口ピラミッド(%)	人口(人)	比	年齢調整後回答者数(人)	年齢調整後割合(%)
30代以下	29	8.7%	32.98%	10917	8.4	243.6	33.97%
40代	27	8.1%	11.12%	3682	3.0	81	11.30%
50代	60	18.0%	13.39%	4432	1.7	102	14.23%
60代	128	38.3%	17.30%	5726	1.0	128	17.85%
70代	68	20.4%	13.17%	4359	1.4	95.2	13.28%
80代以上	22	6.6%	12.00%	3987	4.0	88	12.27%
総数	334					737.8	

アンケート回答者の年齢層と, 大野市の年齢層を比較するとアンケート回答者は 60 代の割合が非常に多いものとなった.そこで 60 代の回答者数を基準にし, 年齢による回答数の調整を行い, 調整後の数を用いて分析を行った.

表 2.2-2 年齢調整を行った集計の例

参加度合い	全然そう思わない					そう思わない						
	30代以下	50代	60代	70代	総計	30代以下	40代	50代	60代	70代	80代以上	総計
あえて参加しない									1			1
参加しない						25.2	3	1.7	1		4	34.9
消極的であるが参加している	8.4		1		9.4	16.8	3	3.4	7	7		37.2
誘われたので参加している				1.4	1.4	16.8	3	1.7	7	2.8		31.3
自主的に参加している	8.4			1.4	9.8				4	1.4	4	9.4
積極的に参加している		1.7		1.4	3.1				1	2.8		3.8
総計	16.8	1.7	1	4.2	23.7	58.8	9	6.8	21	14	8	117.6

表 2.2-2 は年齢調整の例である。例えば 30 代以下の値が 8.4 や 25.2 となっているのは実際のサンプル数である 1 や 3 に 60 代の回答者を基準にとった比である 8.4 をかけて導き出した値であり、この数字を用いた。

2.2.2 分析に用いたアンケートの質問項目

大野市全体や複数の小学校区に関わる活動に対する協力の度合いについて、「積極的に参加している」「自主的に参加している」「誘われたので参加している」「消極的であるが参加している」「参加しない」「あえて参加しない」の 6 段階で質問し、本研究では「積極的に参加している」「自主的に参加している」を「自発的参加」、「誘われたので参加している」「消極的であるが参加している」を「受動的参加」、「参加しない」「あえて参加しない」を「不参加」と分類分けし、13 の質問項目を用いて分析を行い「自発的参加」「受動的参加」「不参加」の特徴を導き出した。13 の質問項目は以下の通りであり「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」「全然そう思わない」の 5 段階で回答を求めた。

- ①大野市の整備は行政がやってくれるだろうと思っている
- ②大野市をよくする活動は、熱心な人に任せればよい
- ③大野市の問題に取り組む活動に、市民は参加すべきだ
- ④大野市で問題が生じたとき、大野市全体の事を考えた発言をしたい
- ⑤問題解決に向けて、行政や近隣住民と話し合っ決めていきたい
- ⑥大野市で問題が生じたとき、自分の生活を改善するために発言していきたい
- ⑦自分にとって、大野市の問題は重要な関心事だ
- ⑧あなたは、大野市の問題について、積極的に発言すべきだと思う
- ⑨自分は、大野市のことをよく知っていると思う
- ⑩行政は、市民にもっと情報を公開すべきだと思う
- ⑪自分自身が発言することによって大野市の問題を解決できると思う
- ⑫大野市の問題について発言することは容易だと思う
- ⑬土地柄と地域活動がマッチしていないと感じることがある

2.2.3 分析結果

アンケート結果は、前述したように年齢による回答数の調整を行った後のデータを利用した。

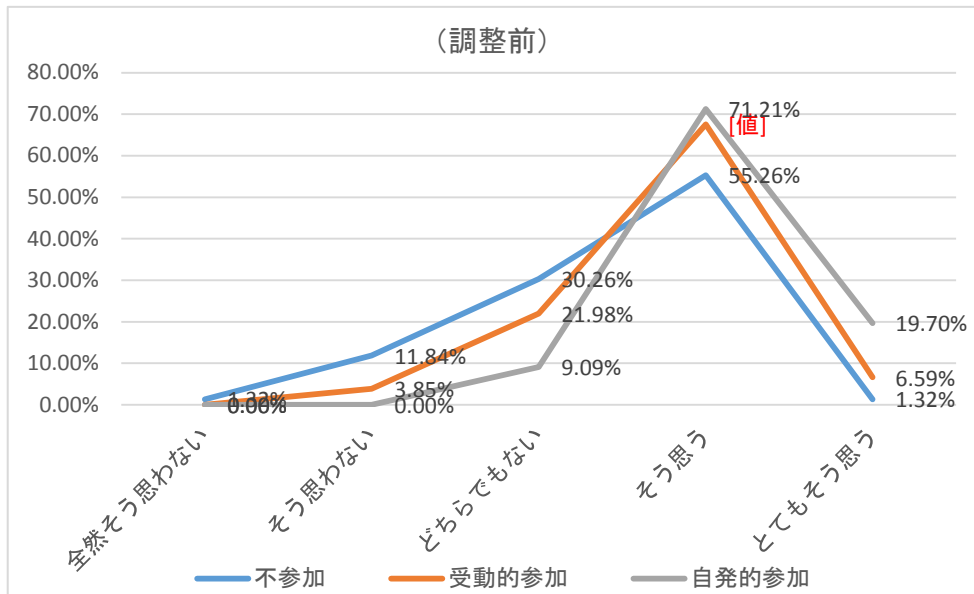


図 2.2-1 年齢調整前の結果

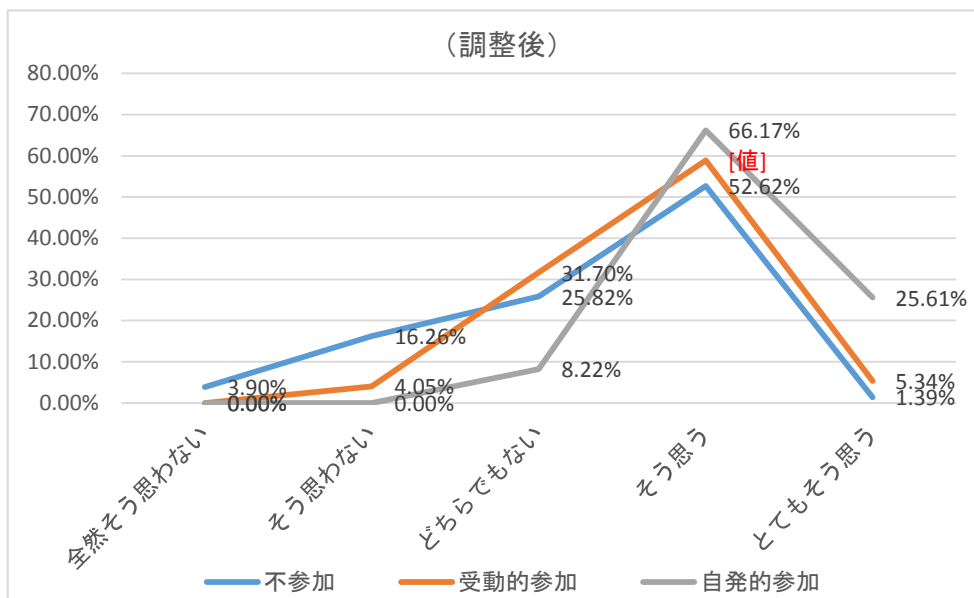


図 2.2-2 年齢調整後の分析結果

図 2.2-1, 図 2.2-2 は「問題解決に向けて、行政や近隣住民と話し合っ決めていきたい」という質問項目の分析結果である。年齢調整前後で 67.58%と 58.91%といった 8.67 ポイントもの差が生じる点や、不参加と受動的参加の関係が逆になっている箇所がある。このグラフから「問題解決に向けて、行政や近隣住民と話し合っ決めていきたい」という考えは活動への参加度合いが低い場合であっても肯定的な意見が多く、活動への参加度合いが増すにつれて否定的な意見が減少し

ていることが分かる。その他 12 の質問項目も同様に分析を行うと、「不参加」から「受動的参加」へと住民参加の段階が上がることで住民の地域に対する発言願望、行政に対して情報を求める意識や地域の問題への関心、地域住民との協力意識や地域の問題への当事者意識が醸成され、地域の事は熱心な人に任せればよいという考えが減少したことが分かった。また「受動的参加」から「自発的参加」へと住民参加の段階が上がることで「不参加」から「受動的参加」へのステップで醸成した感情に加え、活動への不満も生じていることが分かった。加えて、熱心な人に任せることだけでなく、大野市の事を行政だけに任せることに対して否定的な考えも増加したことが分かった。分析から見た各参加形態の特徴をまとめると以下の通りになる。

「不参加」

地域が良くなることはいいことだと感じているが、自分から何かをしてまでと思っている人は少ない。

「受動的参加」

発言願望や当事者意識など意識の変化が見られ、熱心な人に任せることには否定的になるが行政に否定的な人は現れない。

「自発的参加」

受動的参加に生じた特徴に加え、活動への不満点や行政任せにすることへの否定的な人も現れる。

しかし大野市全体や複数の小学校区に関わる活動に対する協力の度合いとは抽象的なものであり、地域の事を考えて行動しているわけではないから「不参加」、理由は無いが足を運ぶイベントがあるから「自発的参加」などと回答者次第で定義が変わってくる。そのためここで導き出した特徴はあくまで今後行う調査の参考に使うものとする。

第3章 住民参加段階の実態調査

本章では、現在行われている地域活動において、地域活動に不参加の住民がどのようなきっかけで活動に参加するようになり、その後どのようにして活動に定着していくのかの過程・要因を明確にするために実施したヒアリング調査について述べる。ヒアリング調査のターゲット層は本研究で定めた住民参加の分類分けで言うと「不参加」「行政＞住民の参加」である。

3.1 調査概要

今回、平成30年10月27日(土)、28日(日)に開催された九頭竜湖紅葉まつり、また平成30年11月3日(土)、4日(日)に開催された越前おおの小京都物産五番まつり来場者に対しヒアリング調査を行った。調査項目は来場者全体に聞く内容として①基本項目②来場きっかけ③初めて来た際の来場きっかけ④他の観光イベントへの参加度合い⑤次回以降参加意向⑥イベントへの発言⑦大野市の良いところ、悪いところの7つとし、それに加えて大野市在住の方には⑧大野市の足りない点と地域活動に関わるならばどの分野に関わるか、大野市在住以外の方には⑨大野市来場頻度と移動ルート聞き、越前おおの小京都まつり来場者に対してはイベント開催地である⑩五番通りに普段どのくらいの頻度で訪れるのかも聞いた。調査項目⑧⑨は行政からの依頼、⑩は商店街からの依頼項目である。

3.2 ヒアリング調査質問項目

①基本項目

ヒアリング調査回答者の基本的なデータを集めるために、性別/年齢/交通手段/グループ人数/間柄/来場回数について回答を求めた。

②来場きっかけ

来場者に対し今回イベントに来場したきっかけを以下の項目の中で3つまで(優先順位をつけて)回答を求めた。今回初めて来場したという来場者に対しては回答を求めず③の回答を来場きっかけとした。

A1)活動の存在を知った/A2)活動の内容を知った/B1)活動に対する興味を持った/B2)活動の内容を気になるようになった/C1)知り合いに活動に参加している人がいる/C2)知り合いに誘われた/D1)参加することで大野の活性化に繋がると思った/D2)健康のために外に出るきっかけとなった/E)毎年来ている/その他

③初めて来た際の来場きっかけ

来場者に対し来場者が初めてイベントに訪れた際のきっかけを以下の項目の中で3つまで(優先順位をつけて)回答を求めた。

A1)活動の存在を知った/A2)活動の内容を知った/B1)活動に対する興味を持った/B2)活動の内容を気になるようになった/C1)知り合いに活動に参加している人がいる/C2)知り合いに誘われた

/D1)参加することで大野の活性化に繋がると思った/D2)健康のために外に出るきっかけとなった
/E)毎年来ている/その他

④他のイベントへの参加度合い

来場者に対し九頭竜湖紅葉まつり, または越前おおの小京都まつり以外に開催されている観光イベントに普段参加しているのかどうかについて, 「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」「全然そう思わない」の5段階での回答を求めた.

⑤次回以降参加意向

来場者に対し来年度以降開催される同一のイベントに参加する意思があるかについて理由とともに「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」「全然そう思わない」の5段階での回答を求めた.

⑥イベントへの発言

来場者に対しイベントでその他あったらいいと思う企画, イベントとその理由の回答を求め発言の有無, また発言内容を整理した.

⑦大野市の良いところ, 悪いところ

来場者に対し大野市の良いところ, 悪いところを以下の項目の中(複数回答可)で回答を求めた.

【良いところ】

「水が綺麗」「自然が多い」「人と人が近い」「何かをすると浸透しやすい」「時間の流れがゆっくりしている」「その他」

【悪いところ】

「虫や野生動物が多い」「人と人が近い」「病院や店が少ない」「交通手段が少ない」「少子高齢化が進んでいる」「仕事量の幅広さが無い」「その他」

⑧大野市の足りない点と地域活動に関わるならばどの分野に関わるか

来場者の中で大野市在住の方に対し, 大野市の「観光」「教育」「防災」「その他」の中で足りないと感じる点の回答を求めた. それに加え自分たちが地域活動に関わるならばどの分野に興味があるか「観光」「教育」「防災」「その他」の中から回答を求めた.

⑨大野市来場頻度と移動ルート

来場者の中で大野市在住以外の方に対し, 大野市への訪問頻度とイベント当日の他の立ち寄り先(家を出てから帰る前の移動ルート)の回答を求めた.

⑩五番通りに普段どのくらいの頻度で訪れるのか

越前おおの小京都まつり来場者に対して, イベントが無い普段の生活の中で五番通りを訪れるのか, またどのくらいの頻度で訪れるのかの回答を求めた.

3.2.1 来場きっかけについて

来場きっかけの質問項目は「情報」「興味」「交流」「意義」の 4 種類に分類されている。住民参加についての既存研究や大野人より実際に大野市に在住し活動を行う人の声を参考に、住民参加に至るまでのきっかけには「情報」「興味」「交流」「意義」があると仮説を立てた。質問項目の中では A1)活動の存在を知った/A2)活動の内容を知ったが「情報」、B1)活動に対する興味を持った/B2)活動の内容を気になるようになった、が「興味」、C1)知り合いに活動に参加している人がいる/C2)知り合いに誘われた、が「交流」、D1)参加することで大野の活性化に繋がると思った/D2)健康のために外に出るきっかけとなった、が「意義」であり、意義に関しては「社会的意義」と「個人的意義」があると考え D1)参加することで大野の活性化に繋がると思った、を「社会的意義」、D2)健康のために外に出るきっかけとなった、を「個人的意義」とする。

3.2.2 大野市の良いところ、悪いところについて

大野市の良いところ、悪いところの質問項目は「内部環境」「外部環境」の 2 種類に分類されている。「内部環境」とは自分たちによってコントロールが可能なもの、「外部環境」とはコントロールが不可能なもののことであり、大野市の良いところの「内部環境」は「人と人が近い」「何かをすると浸透しやすい」「時間の流れがゆっくりしている」、「外部環境」は「水が綺麗」「自然が多い」である。大野市の悪いところの「内部環境」は「人と人が近い」「仕事量の幅広さが無い」「病院や店が少ない」、「外部環境」は「虫や野生動物が多い」「交通手段が少ない」「少子高齢化が進んでいる」である。

第4章 住民参加段階の要因分析

4.1 ヒアリング調査集計結果

ヒアリング調査の結果、九頭竜湖紅葉まつりにて 218 サンプル、越前おおの小京都物産五番まつりにて 110 サンプル、計 328 サンプル回収した。

ヒアリング調査を行う際、サンプルの取得率を導くためにイベント会場にて歩行者数を計測した。計測方法として、会場の中心部にて時間帯毎に 30 分間歩行者数を計測し、往復の歩行者数を計測したため実際の数字を倍にし、1 時間の歩行者数を導いたのち、数を半分にし、1 時間の片側歩行者数を求めた。計測を行わなかった時間に関しては前後の時間の数の平均値を利用した。九頭竜湖紅葉まつり、越前おおの小京都まつりともにイベント開催時間は 9:00～16:00 であったが 10 月 28 日(日)の調査では会場である九頭竜国民休養地と九頭竜湖駅を結ぶシャトルバスが 14:10 であり帰宅のピーク時間であったため 13 時台で調査を終了した。また 11 月 4 日(日)の調査においても 15 時を過ぎたころからイベントの撤去が始まったため 14 時台で調査を終了した。

その結果各日程でのサンプル取得率は九頭竜湖紅葉まつりの 10 月 27 日(土)が 2.49%、10 月 28 日(日)が 2.28%、越前おおの小京都まつりの 11 月 3 日(土)が 1.70%、11 月 4 日(日)が 1.77%であった。表 4.1-1、表 4.2-2 がそのサンプル数であり、黒字が実測値、赤字が推計値となっている。

表 4.1-1 九頭竜湖紅葉まつりサンプル数

時間	27日	歩行者数(人)	28日	歩行者数(人)	総計
9時			27	878	27
10時	13	428	15	1291	28
11時	15	888	29	1103	44
12時	13	697	30	1293	43
13時	17	595	37	1483	54
14時	20	604			20
15時	2				2
総計	80	3212	138	6048	218
取得率	2.49%		2.28%		2.35%

表 4.1-2 越前おおの小京都物産五番まつりサンプル数

時間	3日	歩行者数(人)	4日	歩行者数(人)	総計
9時	1				1
10時	15	720	11	937	26
11時	14	699	13	643	27
12時	1	625	17	444	18
13時	11	531	0	444	11
14時	17	616	7	246	24
15時	3	441			3
総計	62	3642	48	2714	110
取得率	1.70%		1.77%		1.73%

表 4.1-3 九頭竜湖紅葉まつり回答者年齢層

年齢層	男性(人)	女性(人)	総計(人)	割合(%)
10代以下	6	6	12	5.50%
20代	8	15	23	10.55%
30代	8	18	26	11.93%
40代	11	29	40	18.35%
50代	15	22	37	16.97%
60代	18	32	50	22.94%
70代	14	12	26	11.93%
80代以上	2	2	4	1.83%
合計	82	136	218	100.00%
男女比	37.61%	62.39%		

表 4.1-4 越前おおの小京都物産五番まつり回答者年齢層

年齢	男性(人)	女性(人)	総計(人)	割合(%)
10代以下		6	6	5.45%
20代	1	8	9	8.18%
30代	6	11	17	15.45%
40代	8	8	16	14.55%
50代	6	16	22	20.00%
60代	12	7	19	17.27%
70代	8	6	14	12.73%
80代以上	4	3	7	6.36%
合計	45	65	110	100.00%
男女比	40.91%	59.09%		

表 4.2-3, 表 4.2-4 はヒアリング調査回答者の性別, 年齢を表にまとめたものである。堤(2018)が行った郵送配布・回収によるアンケート調査では回答者の 64.12%が 60 代以上と, 高齢者の意見が多く反映される結果であったため今年度の調査では年齢に偏りが出ないように意識し調査を行った結果, サンプル数全体での 60 代以上の回答者 36.59%であり大きな年齢の偏りはなかった。大野市全体で 47.36%が男性, 52.64%が女性であるため今回のサンプルは大野市の住民よりも女性の回答者が多い結果となった。また九頭竜湖紅葉まつりでは市内からの来場者が 24.31%, 市外からの来場者が 75.69%と約 4 人に 1 人が市内からの来場者であったことに対し, 越前おおの小京都物産五番まつりでは市内からの来場者が 33.67%, 市外からの来場者が 66.36%と約 3 人に 1 人が市内からの来場者であった。来場者の交通手段もイベント間で相違が見られ, 車での来場者は 2 つのイベントともに約 8 割と大きな差がなかったが公共交通機関を利用した来場者は九頭竜湖紅葉まつりで 16.51%, 越前おおの小京都物産五番まつりで 2.73%であり, 徒歩・自転車の割合は九頭竜湖紅葉まつりで 0.46%, 越前おおの小京都物産五番まつりで 17.27%であった。これらの結果から越前おおの小京都物産五番まつりは比較的近隣からの参加者が多いことが分かる。これは九頭竜湖紅葉まつりが自然や特産物などとの触れ合いがイベントの特徴であることに対し, 越前おおの小京都物

産五番まつりが相互の交流や地元のよさを再発見するという地域との交流に重きを置いているという違いから生じるものである。そこで本研究では九頭竜湖紅葉まつりを「地域資源型」、越前おおの小京都物産五番まつりを「地域交流型」のイベントと呼ぶこととする。

4.2 来場きっかけの分析

4.2.1 初回来場者から見るイベントの特徴

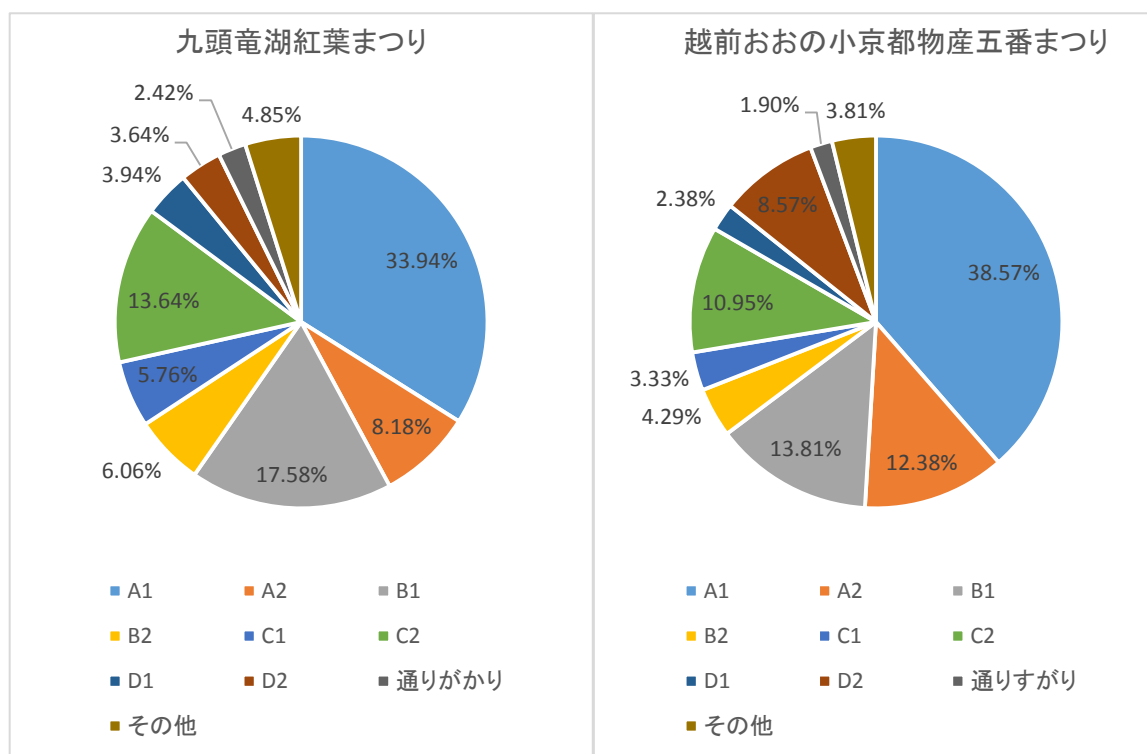


図 4.2.1-1 初めて参加した際の来場きっかけ

イベントごとに来場者が初めてイベントに来場した際のきっかけを述べる。初めて来場したきっかけについても優先順位をつけて 3 つまで可能であったが、優先順位が最も高かったデータのみ抽出してグラフ(図 4.2.1-1)にまとめた。その結果九頭竜湖紅葉まつり、越前おおの小京都物産五番まつりともに最も回答が多かったものは A1(活動の存在を知った)で続いて C2(知り合いに誘われた)が多かった。九頭竜湖紅葉まつりでは B1(活動に対する興味を持った)が 3 番目に多い回答となったが、活動内容として紅葉、野菜、ステージなどと具体的な活動があったからだと考えられる。それに対して越前おおの小京都物産五番まつりで 3 番目に多かった回答は A2(活動の内容を知った)であり、2 つのイベントをまとめた全体では A1(活動の存在を知った)、C2(知り合いに誘われた)、B1(活動に対する興味を持った)の順番で多かった。また越前おおの小京都物産五番まつりでは九頭竜湖紅葉まつりと比較して D1(参加することで大野の活性化に繋がるといった)や D2(健康のためなど外に出るきっかけとなった)と回答した割合が高かった。九頭竜湖紅葉まつりで D2 と回答した

方の全てが市外からの来場者であったことに対し、越前おおの小京都物産五番まつりでは 66.7% が市内の方であったことから、気軽に散歩ついでなどで来ることが出来ることが地域交流型の強みの一つと考えられる。

4.2.2 来場回数による来場きっかけの違い

続いて来場回数別に来場きっかけの分析を行った。

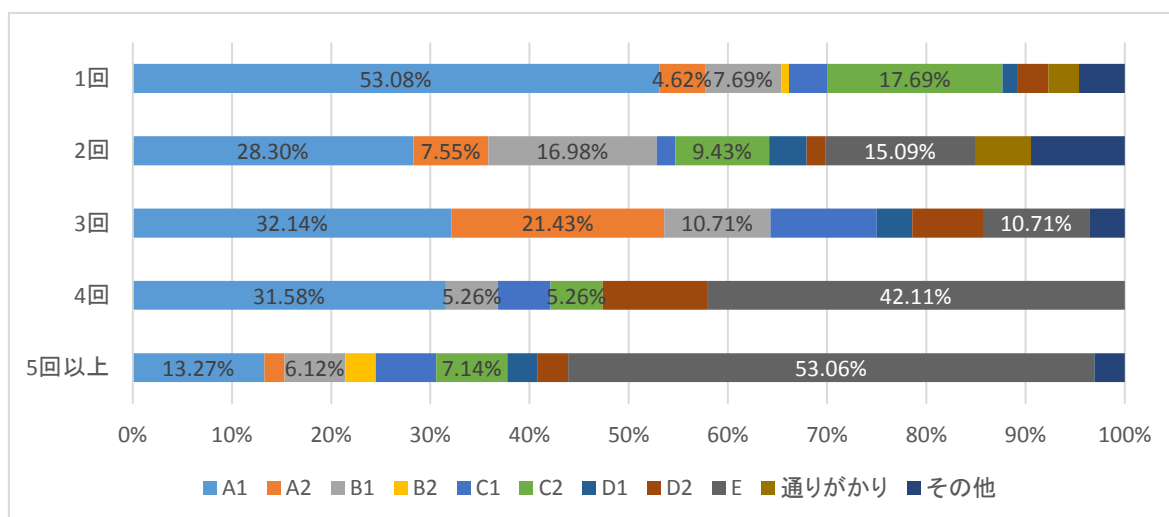


図 4.2.2-1 来場回数別イベント来場きっかけ

表 4.2.2-1 来場回数別イベント来場きっかけ

来場回数	A1	A2	B1	B2	C1	C2	D1	D2	E	通りがかり	その他	総計
1回	53.08%	4.62%	7.69%	0.77%	3.85%	17.69%	1.54%	3.08%	0.00%	3.08%	4.62%	100.00%
2回	28.30%	7.55%	16.98%	0.00%	1.89%	9.43%	3.77%	1.89%	15.09%	5.66%	9.43%	100.00%
3回	32.14%	21.43%	10.71%	0.00%	10.71%	0.00%	3.57%	7.14%	10.71%	0.00%	3.57%	100.00%
4回	31.58%	0.00%	5.26%	0.00%	5.26%	5.26%	0.00%	10.53%	42.11%	0.00%	0.00%	100.00%
5回以上	13.27%	2.04%	6.12%	3.06%	6.12%	7.14%	3.06%	3.06%	53.06%	0.00%	3.06%	100.00%
総計	34.15%	5.49%	8.84%	1.22%	4.88%	10.98%	2.44%	3.66%	21.65%	2.13%	4.57%	100.00%

図 4.2.2-1 および表 4.2.2-1 は 2 つの祭りを合わせた来場回数別に来場きっかけの集計をした結果である。表 4.2.2-1 の赤文字は最も多かった来場きっかけである。これを見ると来場回数が 1 回～3 回と回答した人の来場きっかけは A1(活動の存在を知った)が最も多かったが来場回数が 4 回を越えたところから E(毎年来ている)の回答がもっとも多くなった。このことから各イベントにて来場が習慣となっていると言えるのは来場回数が 4 回を越えたところからだと言える。よって来場回数での分類分けは初めて来場した人を「初回」、来場回数が 2～3 回の人を「複数回」、来場回数 4 回以上の人を「習慣化」とし、この結果は 2 つの祭りで独自で行っても同じ結果となったので来場回数の分類分けは祭り間で分けずに行う。

4.3 参加から定着に至るまで

参加から定着に至るまでのプロセスをここでは「不参加」「初回」「複数回」「習慣化」の4段階とした。「不参加」から「初回」に至るまでは図4.2.1-1に示した通りであり、A1(活動の存在を知った)やC2(知り合いに誘われた)が大きな要因となっている。

4.3.1 初回から複数回

「初回」から「複数回」に至る流れでは「地域資源型」のイベントである九頭竜湖紅葉まつりと、「地域交流型」のイベントである越前おおの小京都物産五番まつりでは異なる点が生じた。またここからは質問項目⑤である次回以降参加意向の「そう

表 4.3.1-1 初回から複数回それぞれの確率

	地域資源型	地域交流型
離脱確立	7.60%	3.92%
定着確立	20.25%	31.37%
複数回来場理由	1.A1(25.42%) 2.B1(16.95%) 3.A2,E(15.25%)	1.A1(40.91%) 2.B1,C2,D1, D2,E(9.09%)

思わない」「全然そう思わない」を選択したものを「離脱」、「とてもそう思う」と選択したものを「定着」と呼ぶこととした。「離脱」に関しては政治経済学者 A.O.ハーシュマン⁵⁾が地域に問題が生じた時、当該地域から離れる行動と定義しており、ここでは地域に問題が生じた時という限定的な状況ではないが地域から離れるという意味より、「離脱」と表現した。A.O.ハーシュマンは「離脱」と対をなす言葉として、地域に問題が生じた時、その問題の解決に向けて働きかける行動を「発言」と定義したが、ここでは「発言」という言葉は使わず、地域から離れていかず残り続ける行動を「定着」とした。

「地域資源型」では離脱確立が7.60%、定着確立が20.25%であったことに対し「地域交流型」では離脱確立が3.92%、定着確立が31.37%であった。また定着理由に関して、「地域資源型」では食べ物や紅葉などイベントの活動内容であることに対し「地域交流型」では町の雰囲気など初めてきて知った内容に惹かれているなど相違が見られた。また複数回来場者の来場きっかけは「地域交流型」ではA1(活動の存在を知った)が40.91%を占めたものの、その他の理由は均等にばらついていたので複数回来場者の来場理由はその人に依存し大きな傾向は無いと考えられる。

4.3.2 複数回から習慣化

「複数回」から「習慣化」に至る流れでの定着確立は「初回」から「複数回」に至るまでと比較して増加しているため、来場回数が増加するにつれて次回以降参加意向が増加することが分かる。しかし離脱確立に関しては来場回数に応じて変化するのか判断出来ない。

表 4.3.2-1 複数回から習慣化それぞれの確率

	地域資源型	地域交流型
離脱確立	3.39%	9.10%
定着確立	45.76%	54.55%
習慣化来場理由	1.E(45.00%) 2.A2(17.50%) 3.C2(8.75%)	1.E(64.86%) 2.A1(13.51%) 3.D2(8.11%)

「複数回」では傾向が見られなかった来場理由も習慣化している来場者には見られた。「地域資源型」ではE(毎年来ている)に次ぐものはA2(活動の内容を知った)、C2(知り合いに誘われた)であ

ったことに対し「地域交流型」では A1(活動の存在を知った), D2(健康のためなど外に出るきっかけとなった)とイベント間での相違も生じる。相違が生じた理由として、「地域資源型」で定着に至った来場者は子供が体験出来る体験コーナー、食事や紅葉などと何度も来場することで明確な理由があることに対し「地域交流型」では近いから、外に出る機会になるなどと気軽に来場する来場者が多いことが考えられる。

習慣化からその後では「地域資源型」で離脱確立が 0.00%, 定着確立が 63.75%であったことに対し「地域交流型」で離脱確立が 2.70%, 定着確立が 86.49%と定着確立に大きな差が生じた。これまで離脱理由には地理的な制約や来場者の時間の都合も生じていたが気軽に訪れる来場者が多い「地域交流型」ではこれらの離脱理由に影響されないことによると考えられる。

4.4 イベントに対する発言

九頭竜湖紅葉まつりと越前おおの小京都物産五番まつり来場者の発言有無の割合を比較した。九頭竜湖紅葉まつりでは発言有りが 19.72%であったことに対し越前おおの小京都物産五番まつりは 40.00%であり、商店街の祭りという特性上発言傾向が高いと考えられる。しかしアンケート回答者数の関係上、発言数は九頭竜湖紅葉まつりで 45、越前おおの小京都物産五番まつりで 44 と大きな差がなかったので同じ方法で分析を行っていく。

4.4.1 発言の有無に関する分析

まず初めに来場回数と発言の有無についての分析を行う。

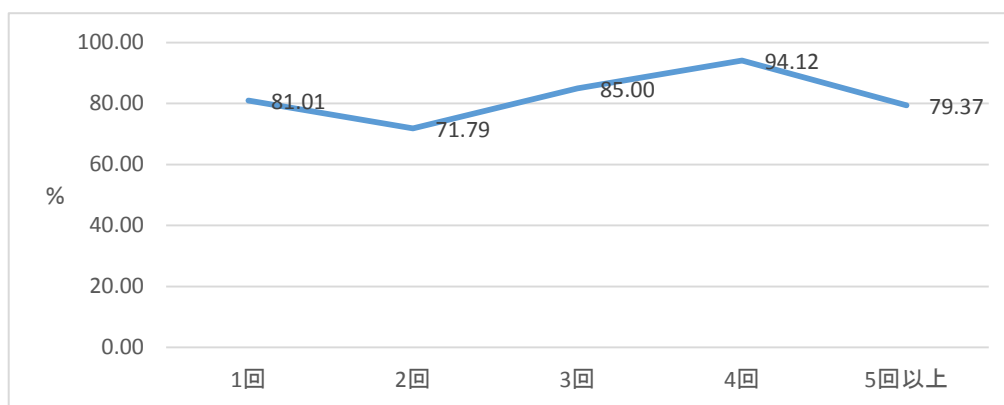


図 4.4.1-1 九頭竜湖紅葉まつり来場回数と発言無し割合

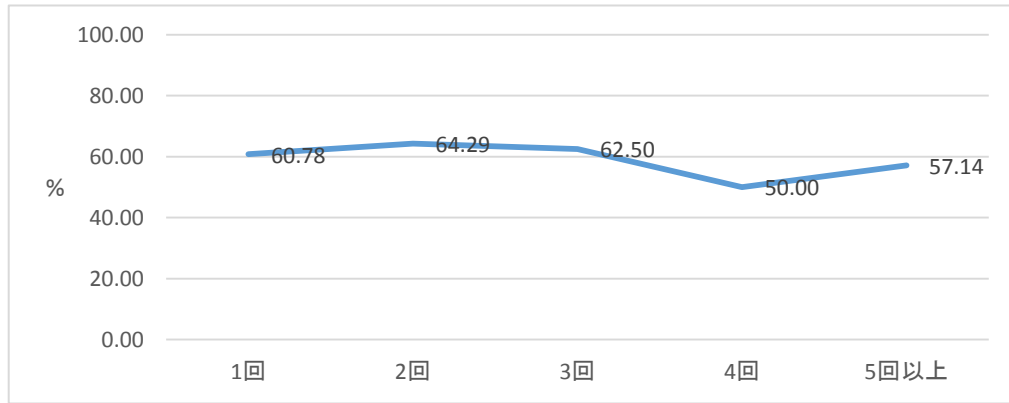


図 4.4.1-2 越前おおの小京都物産五番まつり来場回数と発言無しの割合

グラフに表した際、九頭竜湖紅葉まつりの相関係数が -0.0154 、越前おおの小京都物産五番まつりの相関係数が -0.0244 と低く来場回数と発言の有無の間に相関は無かった。来場回数が4回の地点で何かしらの変化が感じられるが九頭竜湖紅葉まつりの来場回数4回が全体の7.80%、小京都まつりにおいては1.82%でありサンプル数が少ないため変化があるとは言えない。続いて次回以降参加意向と発言の有無についての分析を行う。

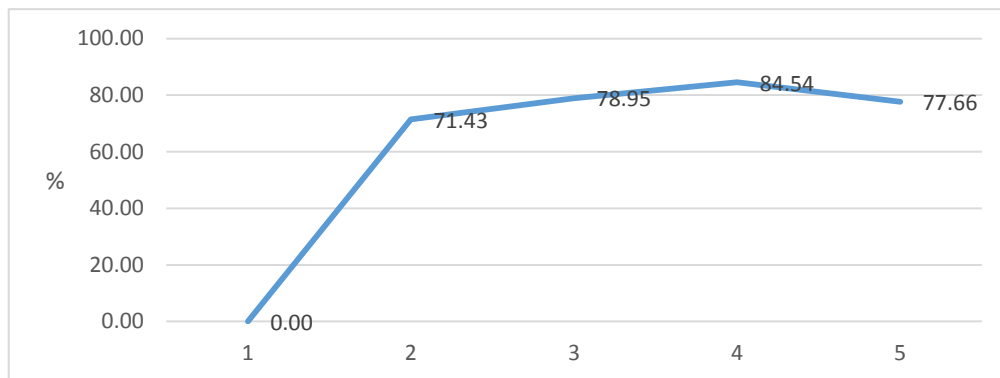


図 4.4.1-3 九頭竜湖紅葉まつり次回以降参加意向と発言無しの割合

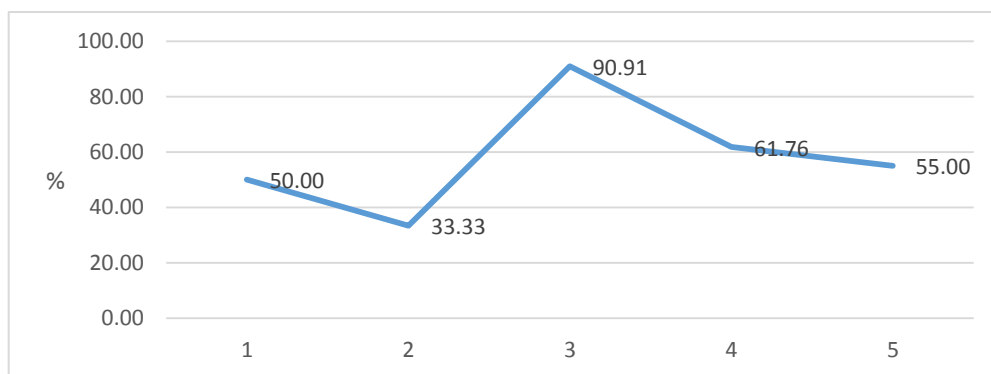


図 4.4.1-4 越前おおの小京都物産五番まつり次回以降参加意向と発言無しの割合

次回以降参加意向は「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」「全然そう思わない」の5段階評価であったが、ここでは「全然そう思わない」から「とてもそう思う」を1～5の5段階評価とした。九頭竜湖紅葉まつりでは来場回数と同じく次回以降参加意向と発言の有無の間に関係性は見いだせなかった。越前おおの小京都物産五番まつりでもグラフを見ると関係性を感じられないが、次回以降参加意向で1, 2と回答した来場者はそれぞれ1.82%, 2.73%しかおらず、サンプル数の少ないこの2つを除外して考えると次回以降参加意向が高くなるにつれ発言有りが多くなっていることが分かる。しかし来場回数では発言に変化が見られなかったのでイベント時に発言し次回以降も参加したいと感じた来場者が実際に次回以降も参加するのか確証は持てない。そのためイベント来場時にまた来たいと感じた来場者を定着させるための新たな集客アプローチを考えなくてはならない。堤(2018)が行ったアンケート調査の再分析では住民参加の段階が上がることで発言願望が醸成されることが分かっていたが、活動への参加度合いでは醸成されるものではない。

5.4.2 発言内容に関する分析

自由記述であったイベントに関する発言内容を分類し、九頭竜湖紅葉まつりと越前おおの小京都物産五番まつりとで比較した。地域住民の発言には、地域の問題解決に寄与する発言だけでなく地域の問題解決に寄与しないばかりか、それを阻害するような発言が生じる可能性もあり、例えば地域住民が自分の個人的な利益のみを求めて発言する場合地域全体の問題解決を導くことは期待し難い⁶⁾ため、ただ発言してもらえば良いという訳ではなく地域住民の協力的発言を促進し非協力的発言を抑制することが重要⁷⁾であるが今回の調査では抑制すべき発言は存在しなかった。

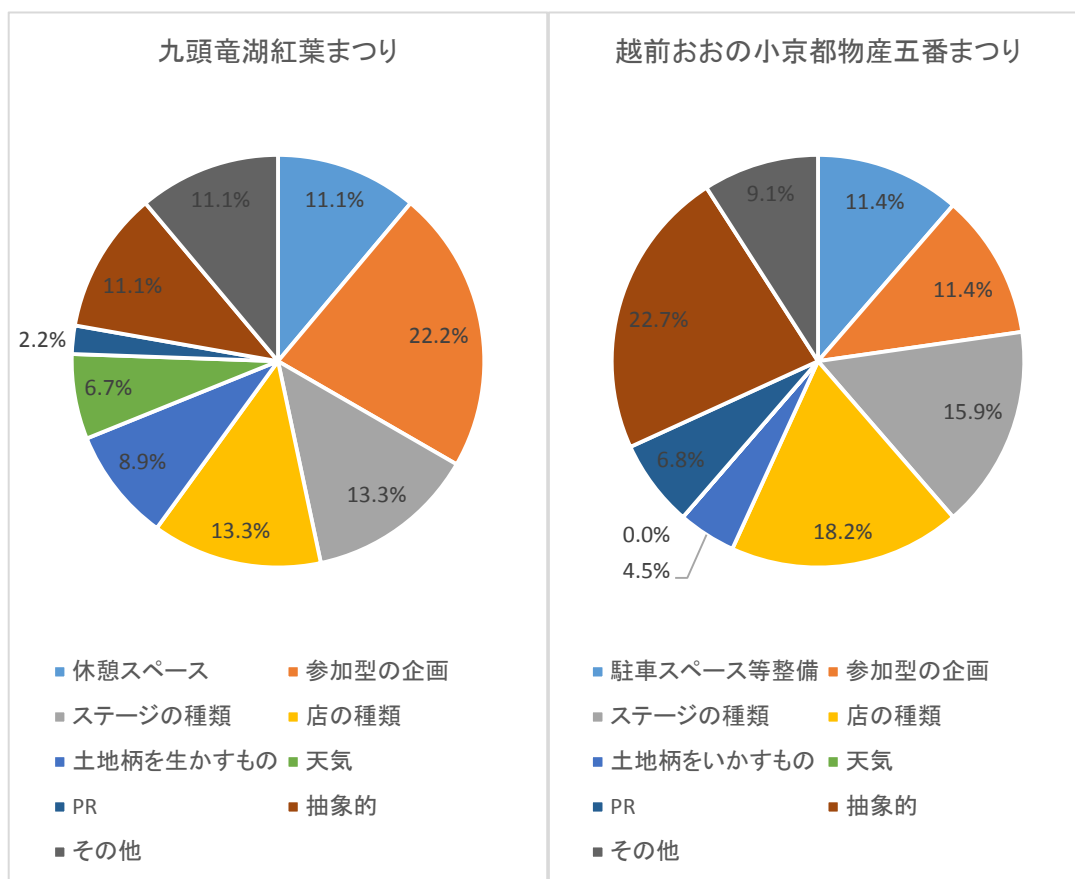


図 4.4.2-1 発言内容

「土地柄を生かすもの」とは自然を楽しみたい、自然に関するイベント、城下町のイベントなど九頭竜湖や五番通り商店街の周りでなければ行えないことについて発言しているものとした。「抽象的」とは新しいものがほしい、勉強になるようなものがほしいなどイベントを良くしてほしいと思いながら具体的な内容までは触れていないものとした。越前おおの小京都物産五番まつりの「駐車スペース等整備」とは駐車場のみならずバリアフリーなど会場内、周辺の設備の向上を希望するものと、九頭竜湖紅葉まつりの「休憩スペース」より広域な意見が多かったので差別化を図った。「PR」とはイベントのPRをもっとしてほしいという回答だが、サンプル数が少ないながらその回答者は全て市外からの来場者であり、毎年来ているという5回以上の来場者を除いて残りは活動の存在や内容を知って初めて来た来場者であったため、市外へのPRをより強くすることで彼らのような活動の存在、内容を知って来場する方を増やすことが期待出来る。しかし九頭竜湖紅葉まつりにてPRについて言及している方は次回以降の参加意向が1(全然そう思わない)で、その理由が「紅葉がメインではなかった」と、知った情報と実際に来て感じた内容に相違があった場合に離脱を促す要因となり得るのでPRを行う際は慎重に行わなくてはならない。

続いて「店の種類」「ステージの種類」といった活動の内容に触れている意見について述べる。これらの回答者の属性を見てみると来場回数やイベント参加度合いとの関係は無かったが、次回以

降の参加度合いが高い人が多く、次回も来ることを見越して詳細な活動の内容について言及していることが分かる。しかし九頭竜湖紅葉まつりで次回以降参加度合いが 2(そう思わない)と回答している人が 1 人ずつ、越前おおの小京都物産五番まつりの「店の種類」で 1(全然そう思わない)と回答している人が 1 人いた。その内容は九頭竜湖紅葉まつりでは値段が高いといった内容で活動内容に満足していないことからである。越前おおの小京都物産五番まつりでは店の数が少ないという意見であるが次回以降参加度合いが低い理由が、今回の来場きっかけが「ついでに来たから」理由であったので活動内容との関係は無かったが、期待していた活動の内容との相違が生じた場合も離脱を促す結果になると考えられる。

4.5 大野市の良いところ、悪いところに関する分析

鈴木・藤井⁸⁾らによると地域への愛着が増すことで町内会活動やまちづくり活動などの地域への活動に熱心であり、行政を信頼し地域改善のための諸活動を他者など自分自身以外の存在に任せない。大野市で行われている地域活動に参加する人の中にも地域の特定の面に愛着や、また不満などを感じている可能性がある。

そこで来場者の住民参加の度合いが上がる過程の背景には、大野市に対する思いや環境などによって影響されるのではないかと考え大野市の良いところ、悪いところに関する質問を行った。また各イベント来場者にも、イベント毎に異なった特性があるのではないかと考えた。

例えば表 4.5-1 は全サンプル中で大野市の良いところが「人と人が近い」と回答した人を年齢別に分類分けしたものであり、全体の割合を大きく上回ったものを赤字で記した。この表からは年齢が上がることで急激に「人と人が近い」ことが大野市の良いところだと感じる人が多くなることが分かる。同様の集計を行い、「交通手段」が少ないことが大野市の悪いところだと感じているのは 40 代以下に偏っていることが分かったが、その他の項目から導き出せる来場者の年齢による特徴は無かった。

表 4.5-1 人と人が近いことが良い

年齢	回答者数	総計	割合
10代以下	0	18	0.00%
20代	6	32	18.75%
30代	8	43	18.60%
40代	5	56	8.93%
50代	11	59	18.64%
60代	8	69	11.59%
70代	13	40	32.50%
80代以上	7	11	63.64%
総計	58	328	17.68%

続いて同様の分析を来場者の他のイベント参加度合い、次回以降参加意向でも行った。上記の通り分析次第では、あるものを良い、または悪いと感じる環境がイベントへの参加に少なからず影響を及ぼしているのではないかと考えたが、この 2 つの項目による分析は特徴的なものがなかった。さらにイベントへの来場回数でも分析を行った。

表 4.5-2 大野市の自然が良い

全サンプル				九頭竜湖紅葉まつり				越前おおの小京都物産五番まつり			
来場回数	回答者数	総計	割合	来場回数	回答者数	総計	割合	来場回数	回答者数	総計	割合
1回	80	130	61.54%	1回	55	79	69.6%	1回	25	51	49.02%
2回	33	53	62.26%	2回	23	39	59.0%	2回	10	14	71.43%
3回	16	28	57.14%	3回	12	20	60.0%	3回	4	8	50.00%
4回	15	19	78.95%	4回	13	17	76.5%	4回	2	2	100.00%
5回以上	71	98	72.45%	5回以上	48	63	76.2%	5回以上	23	35	65.71%
総計	215	328	65.55%	総計	151	218	69.3%	総計	64	110	58.18%

表 4.5-3 大野市の少子高齢化が進んでいる点が悪い

全サンプル				九頭竜湖紅葉まつり				越前おおの小京都物産五番まつり			
来場回数	回答者数	総計	割合	来場回数	回答者数	総計	割合	来場回数	回答者数	総計	割合
1回	14	130	10.77%	1回	8	79	10.13%	1回	6	51	11.76%
2回	8	53	15.09%	2回	4	39	10.26%	2回	4	14	28.57%
3回	4	28	14.29%	3回	2	20	10.00%	3回	2	8	25.00%
4回	4	19	21.05%	4回	3	17	17.65%	4回	1	2	50.00%
5回以上	27	98	27.55%	5回以上	17	63	26.98%	5回以上	10	35	28.57%
総計	57	328	17.38%	総計	34	218	15.60%	総計	23	110	20.91%

表 4.5-2 は来場者の中で大野市の良いところとして「自然が多い」と回答した人の割合である。まず九頭竜湖紅葉まつりと越前おおの小京都物産五番まつりを比較すると「地域資源型」のイベントである九頭竜湖紅葉まつりがより高い。また来場回数が増加するに依りて高くなる。しかしこの分析だけでは大野の「自然が多い」点に惹かれている人が「地域資源型」のイベントに参加し来場回数が増えるのか、または「地域資源型」のイベントへの参加やイベントへの来場回数が増加することで大野の自然の良さに気付くのか、どちらによるものか判断出来ない。

表 4.5-3 の分析結果ではイベントへの来場によって、大野市の悪いところが「少子高齢化が進んでいる」点だという考えが醸成されたと考えることが出来る。来場回数が増加することや、「地域交流型」のイベントである越前おおの小京都物産五番まつりにて高い割合になっていることは、イベントに来場することで住民の年齢層を肌で感じる事が出来るからである。

表 4.5-4 「少子高齢化が進んでいる」を悪い点と回答した人の住所

全サンプル				九頭竜湖紅葉まつり				越前おおの小京都物産五番まつり			
住所	回答者数	総計	割合	住所	回答者数	総計	割合	住所	回答者数	総計	割合
大野市外	26	238	10.92%	大野市外	14	165	8.48%	大野市外	12	73	16.44%
大野市内	31	90	34.44%	大野市	20	53	37.74%	大野市	11	37	29.73%
総計	57	328	17.38%	総計	34	218	15.60%	総計	23	110	20.91%

また「少子高齢化が進んでいる」を悪い点と回答した来場者が大野市外からの来場なのか、大野市内からの来場なのかで分類分けした。全体を通して大野市外からの来場者は、大野市の少子高齢化に気付いていないように感じられるが、越前おおの小京都物産五番まつり来場者は大野市外からの来場者も16.44%の方が大野市の悪いところを「少子高齢化が進んでいる」と回答しており、「地域交流型」のイベントではより少子高齢化が顕在化すると言える。

第5章 まとめ

5.1 本研究の結論

本研究では、福井県大野市で現在行われている地域活動において、地域活動に不参加の住民がどのようなきっかけで活動に参加するようになり、その後どのようにして活動に定着していくのかの過程・要因を明確にするための実態調査としてヒアリング調査を行った。その結果の考察を以下に示す。

- ①地域活動への住民参加を来場回数で見ると、来場回数が4回を超えたところ毎年来ているという理由で来場する人が最も多くなり、4回以上からリピーターであると言える。その結果、来場回数を「初回」「複数回」「習慣化」と分類分けすることが出来る。
- ②地域活動の「不参加」から「参加」、「定着」への流れはイベントの種類によって異なる。「地域資源型」のイベントは実際に行われている活動の内容や、自然や特産物といった地域資源が参加を促すきっかけとなるが、「地域交流型」のイベントは街や人の雰囲気にも惹かれ、その後は外出のきっかけになるなど気軽な理由が参加を促すきっかけとなっており、活動への定着確立も高い。
- ③住民参加の段階が上がるにつれて地域に対する発言の頻度や発言を行う願望、地域への愛着が増加することは分かっていたが、今回利用した来場回数、次回以降参加意向といった尺度との関係は確認出来ず、住民それぞれに依存する。
- ④「地域資源型」のイベントには九頭竜湖紅葉まつりの他にでっち羊かんまつり、九頭竜湖新緑まつり、越前おおの産業と食彩フェア、新そばまつりが、「地域交流型」のイベントには越前おおの小京都物産五番まつりの他に三大朝市物産まつり、越前おおの結の夜市、てらまち万灯会、六呂師高原アルプス音楽祭があり、これらのイベントでは共通の集客アプローチが行えると考えられる。

5.2 今後の課題

本研究では住民参加の段階という抽象的な概念を、「不参加」「受動的参加」「受動的参加」といった住民の思考によるものではなく、「不参加」「初回」「複数回」「習慣化」といった回数で分類分け出来るものを利用した。その結果、イベント毎に定着に至るまでのきっかけや地域活動に定着する確率などを求めることが出来たが、住民の地域活動への発言などといった行動の傾向は掴むことが出来なかった。したがって、住民の考えをより深く引き出す工夫が必要である。

また今回の調査では調査対象がイベント来場者であったため市内外からの来場者からサンプルを聴取したが、住民参加の段階が上がると大野市在住の内部人材と、大野市外から来場する外部人材とでは地域に対する役割や意見に相違が見られることも考えられるので、今後は内部人材

と外部人材を区別して扱う必要がある。

離脱を選択する住民や地域に問題に無関心な住民が地域活動を変化させる要因となる意見を持っているが、今回のような調査を行わない限り意見を言う場がこれまで存在しなかったため、大野市としては今後、住民が行政に対して意見を言う場の提供が必要である。

参考文献

- 1)羽鳥剛史,片岡由香,尾崎誠:市民活動の持続可能性に関する心理要因分析,土木学会論文集 D3(土木計画学),Vol.72,No.5,I_407-I_414,2016年
- 2)柳澤友樹,高山純一,中山晶一郎:過疎地域における行政主導型の住民参加実施によるコミュニティバス運行計画策定とその結果分析,土木計画学研究・論文集 Vol.22 no.4 2005年
- 3)高秀賢史,高岡耕子,永井衛:来訪者からみた祭りの便益に関する比較分析,日本都市計画学会都市計画論文集 No.39-3 2004年
- 4)醍醐考典,保井俊之,坂倉杏介,前野隆:住民参加まちづくりにおける主体形成 10 ステップモデルの提案,地域活性研究 Vol.7 109-118 2016年
- 5)Hirschman, A.O. Exit, Voice, and Loyalty: Responses to Decline in Firms, Organizations, and States, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1970.
- 6)羽鳥剛史,小林潔司,鄭蝦榮:討議理論と公的理論の規範的評価,土木学会論文集 D3(土木計画学),Vol.69,No 2,pp. 101-120,2013年
- 7)羽鳥剛史,中神ちなつ:地域住民の発言行動の規定要因に関する研究,土木学会論文集 D3(土木計画学),Vol.70,No.5(土木計画学研究・論文集第31巻),I_335-I_341,2014
- 8)鈴木春菜,藤井聡:地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究,土木計画学研究・論文集 Vol.25 no.2 2008年

資料

「結の故郷」づくりに向けたイベント参加者ヒアリング調査票

問 1. あなたご自身のことについてお伺いいたします

性別	男性・女性		
年齢	10代以下	20代	30代 40代 50代 60代 70代 80代以上
交通手段	車・電車・バス・その他()		
グループ人数	人	間柄	家族・友人・その他()
これまでに来た回数	回		

問 2 今回来場したきっかけを3つまで(優先順位をつけて)教えてください

- 活動の存在を知った 活動の内容を知った
 活動に対する興味を持った 活動の内容を気になるようになった
 知り合いに活動に参加している人がいる 知り合いに誘われた
 参加することで大野の活性化に繋がると思った
 健康のためなどの外に出るきっかけとなった 毎年来ている
 その他()

問 3 来場 2 回目以上の方に質問です,初めて来場した時のきっかけを3つまで(優先順位をつけて)教えてください

- 活動の存在を知った 活動の内容を知った
 活動に対する興味を持った 活動の内容を気になるようになった
 知り合いに活動に参加している人がいる 知り合いに誘われた
 参加することで大野の活性化に繋がると思った
 健康のためなどの外に出るきっかけとなった
 その他()

問 4 あなたは普段観光イベントに積極的に参加していますか

- とてもそう思う そう思う どちらでもない
 そう思わない 全然そう思わない

問 5. 次回以降も参加すると思いますか,またその理由を教えてください

- とてもそう思う そう思う どちらでもない
 そう思わない 全然そう思わない

・理由

